



TITLE:

<第1章>高等教育研究開発推進センター外部評価懇談会(<1>外部評価懇談会<2>記録:<2>大学教育評価システム研究分野の活動と展望)

AUTHOR(S):

大塚, 雄作

CITATION:

大塚, 雄作. <第1章>高等教育研究開発推進センター外部評価懇談会(<1>外部評価懇談会<2>記録:<2>大学教育評価システム研究分野の活動と展望). 京都大学高等教育叢書 2006, 22: 29-30

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54031>

RIGHT:

2. 大学教育評価システム研究分野の活動と展望

高等教育研究開発推進センター・教授

大塚 雄作

(大塚) それでは、私のほうからは、今、田中さんから紹介がありましたように、「大学教育評価システム研究分野」というところにかかわっておりますので、その大学教育評価にかかわってセンターがどういうことをやってきているか、またどういう課題を持っているのかということを中心にまとめてさせていただきます。

私も昨年 10 月からこちらに来たばかりで、今までの話もなるほどと、むしろ外部の立場で聞いている部分が多いぐらいでして、その経緯を十分に把握しているわけではないのですが、私がメディア教育開発センターにいたときから、この教授システム開発センターとはいろいろと連携して、SCS の研修や我々の研修シリーズに田中先生に来ていただいたりしておりまして、何となくはセンターの評価に関する考え方にも触れていました。私が最初にこのセンターの活動そのものにコミットしたのは、配付資料(資料 B)の最初にあります『生成的組織評価をめざして』という、京都大学高等教育叢書 9 巻で 2000 年に出ておりますが、1999 年に高等教育教授システム開発センターの外部評価をやったときの外部評価委員として携わったときでありまして、そのときの外部評価委員の委員長は天野郁夫先生でした。今はフランスに在外研究に出られていてここにはおりませんが、大山さんが中心になって自己点検評価の報告書をまとめられたようですが、そこに外部評価の在り方や評価の理念についてもまとめられておりました。それは、『生成的組織評価』の叢書にまとめられていますが、これが私ども外部評価委員には非常に参考になりました。1999 年の段階では、私はまだ大学評価には携わっていませんでしたし、レジュメに挙げました大学評価に関する 7 つの基本的考え方などは本当に「評価」のことをしっかりと踏まえて作られているなあと感心した次第です。たとえば、当然と言えば当然のことなのかもしれませんが、メタ評価者というものをどう位置づけるかとか、それから、むしろ評価というのは客観的、客観的といわれますが、評価のバイアスというものをむしろ積極的に利用したほうがこういった改善には生きるのだとか、そのような考え方が、我々にまず送られてきました自己点検評価の報告書から明確に記載されておりまして、そういう意味で非常に面白くやらせていただいたのです。

これは、実は私が大学評価・学位授与機構に赴任して大学評価に関わった際にも、この『生成的組織評価をめざして』にある考え方を、しばしば伝えても来ましたが、機構への赴任の挨拶にも、「元気の出る評価をめざして」という題で書いているのですが、それは昨秋、京大に赴任することになりまして、その目標は達成できずに、結果的には半ばで挫折した格好で、大学評価・学位授与機構を離れることになりましたけれども、「生成的組織評価」という言葉は使っておりませんが、レジュメにも示しましたような論文などで、私自身も、その経験に基づいて、組織の改善に役立つ評価の在り方のようなものをまとめたりもしておりますし、また、大山さん自身もいろいろなところでその考え方をベースにした論文を書いております。それから、松下さんもいろいろなところで、評価に関連した

論文を書いています、この資料からは抜けております。

そういう意味で、私自身の、大学評価も含めて教育評価等の評価の在り方の基本的な考え方というのは、私は 10 月に来たばかりですけれども、大学評価機構の経験というよりは、このときの経験が基になってできてきている部分があります。その辺の基本的な考え方、理念的なものを、いかに実際の大学評価や、あるいは京大の教育評価の中に、具体的な形で生かしていけるかということが私どもの課題ということになります。

具体的な活動としましては、まず、京都大学の大学評価への関わりがあります。今田中先生のほうからご紹介がありましたが、私自身は早速何やら「大学評価支援室」というものができまして、そこの室長をおおせつかっております。レジュメに、京都大学の大学評価にかかわる実施組織が示されておりますが、いちばん上に「大学評価委員会」というものがあります。いわゆるプランとシーといいますか、シーとプランといいますか、この大学評価委員会はその評価、企画にかかわる理事が委員長になっております。それで、各部長クラスが委員となっているところです。このセンターからは、林哲介先生と私とその委員会のメンバーとして入っております。

その大学評価委員会のもとに、大学評価委員会にいろいろ議題などを提出する、具体的な案を練る「大学評価小委員会」というものがありまして、私が大学評価委員会に入っているのはこの小委員会のメンバーであるからということで、そこに林哲介先生も入っております。

その大学評価小委員会の、ある意味で実行部隊として「自己点検評価実行委員会」というものがありまして、その委員長が林先生です。そして、我々のセンターからは松下先生が委員として入っております。

この大学評価委員会、大学評価小委員会、自己点検評価実行委員会というものがあって、それを横からすべて補佐するような位置にあるのが「大学評価支援室」で、これはむしろ事務が主体の支援室です。そんな実行組織になっておりまして、実際に今は国立大学法人の年度評価というものがやられておりまして、その補佐を実際に行っております。

以上のような大学評価を、京都大学でこれからどうしていくべきかというようなところに、センターもこのような形でかかわっているということが一つあります。

それから、あとで松下さんのほうから紹介がありますが、「特色 GP」のプロジェクトの中で、先ほど田中さんのほうからも紹介がありましたけれども、相互研修型 FD の組織化ということがこれからの一つの課題となっているわけですが、その組織化の試みの一環として、前高等教育教授システム開発センター長の荒木先生が、今、工学部の研究科長をやられている関係もあって、また、JABEE 等々の工学部関連での評価の動きもありまして、体系的な授業アンケート（資料 C）を導入するプロジェクトに、主体的に関わる形で支援してきております。これは、単なる授業評価というよりも、いわゆる工学部の教育活動を、教育課程、カリキュラム的視点から改善していくための情報を収集する一つの手段として、授業アンケートを支援しているということでもあります。

それから、「学生調査」と書いてありますが、この「学生」というのは卒業生も含めた意味で、工学部では、卒業生調査も実施しておりまして、これからそれを継続してやっていこうという計画もあります。

学生調査に関しては、このセンターが実施したり関わってきたものとして、「京

都大学卒業生の意識調査」、「京都大学の教育と学生生活」といったような形のものが今までも行われてきておりますが、このような情報収集の部分を現在も支援していくという役割を担っているということです。

この点では、後で、教員と学生の交流会の中の一つのワーキンググループでも、学生の意見を収集する調査が行われております。また、先日、コンソーシアム京都のシンポジウムで山田礼子さんが紹介してくれたことで、なるほどと思ったのですが、UCLAに「HERI」という、インスティテューショナル・リサーチを担当する組織があって、その学生意識調査が、全米に大体年間 700 大学ぐらいで利用されていて、独立採算もできるような機関になっているそうなのですが、その調査結果が各大学のインスティテューショナル・リサーチにも活用されているというような話も聞きました。そんなことも、我々のセンターの場合によっては一つの目標となる像として、あり得るのかななどということを最近感じております。

あと、大学教育研究フォーラムなどで評価に関するディスカッションなどをしてきています。このような活動をしながら、大学評価というのはこれから避けられない時代の中にある、「生成的組織化」というような言葉が、では具体的に一体どういう形で実現でき得るのかということが我々の取り組むべき課題ということになろうかと思えます。特に、改善ということを考えるときに、いろいろな問題点も洗い出して公表せざるを得ないということになりますが、外部にそれを公表するということと、外部に対して説明責任を果たすといったこととの葛藤が非常に大きいということが現実にあるわけです。それをいかに克服していくことができるのか、単に評価のためとか、いい点を取るための評価ということではなく、実際の改善等に生きる、そのような評価を京大内で定着させていくこと、それがひいては日本の大学にもまた波及していけばいいと思っているのですが、そんな評価のあり方を模索して行ければと考えています。その辺を京都大学の実際の具体的な活動の中で、アクション・リサーチ的にアプローチをしていきたいというようなところかと思えます。とりあえず以上です。

(田中) どうもありがとうございました。

では、次は松下さん。

【参考資料】高等教育研究開発推進センター外部評価懇談会 at リーガロイヤルホテル京都

2005. 3. 30

高等教育研究開発推進センター

高等教育教授システム研究開発部門（第Ⅰ部門）

大学教育評価システム研究分野の活動と展望

（報告） 大塚雄作

◆教育評価・大学評価システムの研究

◇基本的な考え方 『生成的組織評価をめざして』 京都大学高等教育叢書 9 2000

1. 自己評価と外部評価の緊密な連結
2. 自己評価者と外部評価者の相互フィードバック的な評価
3. メタ評価者の存在と、それに対する評価
4. 評価過程そのものの重視
5. 評価のバイアスの積極的利用
6. システム内的観点からの評価基準の考案
7. 理念と活動の相互フィードバック的な評価

↓

Cf. 大塚雄作 2002 高等教育における評価の諸要素とその機能——改善志向の評価文化の形成に向けて 大学評価, No.1, pp.27-66. 大学評価・学位授与機構

大山泰宏 2003 大学教育評価論 京都大学高等教育研究開発推進センター編 『大学教育学』第3章 pp.39-62. 培風館

大山泰宏 2004 教育の評価——教育評価の理論と実践 山野井敦徳・清水一彦（編著）『大学評価の展開』 pp.55-80. 東信堂

大塚雄作 2005 学習コミュニティ形成に向けての授業評価の課題 溝上慎一・藤田哲也（編）『心理学者、大学教育への挑戦』 pp.2-37. ナカニシヤ出版

◇現在の主な活動

○ 京都大学大学評価への協力

大学評価委員会・・・・・・林哲介・大塚雄作
大学評価小委員会・・・・・・林哲介・大塚雄作
自己点検評価実行委員会・・・・林哲介（委員長）・松下佳代
大学評価支援室・・・・・・大塚雄作（室長）

○ 授業アンケートの支援（特色 GP）・・・・松下佳代・大塚雄作

平成 16 年度後期・工学部 3 学科（建築・地球工学・電気電子工学）で実施

○ 学生調査（特色 GP）・・・・・・神藤貴昭・酒井博之

平成 16 年度・工学部で実施

Cf. 梶田叡一・溝上慎一・浅田匡 1997 京都大学卒業者の意識調査——京都大学で受けた教育の評価と人生観 京都大学高等教育叢書 1

全学共通科目レビュー委員会・調査小委員会 1997 京都大学の教育と学生生活——4 回生の意見

Cf. HERI (the Higher education Research Institute) at UCLA

学生意識調査（CIRP、YFCY、CSS 等）が全米の大学で利用
→ 各大学の IR (Institutional Research) に活用

○ 大学教育研究フォーラム

平成 16 年度・第 11 回 『大学教育評価——評価する側の論理』

木村孟・奈良哲・前田早苗・吉田文・松下佳代・林哲介・大塚雄作

平成 15 年度・第 10 回 『今こそ大学教育の改善を問い直す——COL の投げかけるもの』

絹川正吉・林哲介・遠藤隆久・近田政博・井下理・田中毎実・松下佳代

平成 13 年度・第 8 回 『大学教育評価をどうするか——評価から FD へ』

館昭・安岡高志・大山泰宏・荒木光彦・溝上慎一

◇今後の課題

- 生成的組織化の方向性・・・・「生成＝自律的改善のための評価」「組織化」
- 自律的改善と説明責任との葛藤の克服
- 京都大学の自己表現の探索・・・・「自由の学風」「自学自習」をどう表現するか

工学部 授業アンケート

高等教育研究開発推進センター（以下、センター）では、大学教育に関わる研究に基づいて、京都大学の教育活動を支援・促進するためのさまざまな活動・取組を行っています。

本アンケートは、その一環として、皆さんにこの授業の学習を振り返っていただくことを通して、授業やカリキュラムの改善に生かしていくためのものです。氏名、学生番号を記入していただくのは、他の授業アンケート等との関連性の分析のためです。

アンケートの回答は、クラスごとの回収封筒に直接入れていただき、封をしてセンターに送付された後は、コンピュータ処理により統計的に分析するなど、個人名が表出することは決してありません。授業担当の先生方には成績評価完了後に、個人名等の情報は除かれて、自由記述回答も含めて、コンピュータ出力された結果がセンターからフィードバックされますので、回答内容が個人の成績評価等に影響を及ぼすことも一切ありません。

この学習の振り返りが、皆さんご自身の今後の学びの深まりにつながればと思います。


以上の趣旨を踏まえて、皆さんの感じたままを率直にご回答ください。

（京都大学高等教育研究開発推進センター）

記入上の注意

1. 記入は必ずHBの黒鉛筆、又は黒ボールペンで正確に塗りつぶしてください。
2. 訂正する場合は、消しゴムできれいに消してください。
3. 回答用紙を汚したり、折り曲げたりしないでください。
4. 正しく記入（塗りつぶし）されていない場合は無効となります。

記入例

良い例 

悪い例   

科目名										氏 名									
学 生 番 号										実 施 日				年 齢		数字を記入してください ←			
										月		日							
<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	<1>	性別	出席率		
<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>	<2>				
<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<3>	<1> 男	<5> 9割以上		
<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<4>	<2> 女	<4> 9～7割		
<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>	<5>		<3> 7～5割		
<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>	<6>		<2> 5～3割		
<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>	<7>		<1> 3割未満		
<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>	<8>				
<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>	<9>				
<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>	<0>				

■ 今学期の本授業の学習を振り返ってみて、以下のそれぞれの項目について、あなた自身はどの程度あてはまると思いますか。4段階で評定して該当する欄にマークしてください。

① 自分自身の学習状況等について	4 あてはまる	3 ややあてはまる	2 あまりあてはまらない	1 あてはまらない
(1) シラバスを参考にした	<4>	<3>	<2>	<1>
(2) 授業の予復習をするように努めた	<4>	<3>	<2>	<1>
(3) 授業中は授業に集中していた	<4>	<3>	<2>	<1>
(4) 与えられた課題にきちんと取り組んだ	<4>	<3>	<2>	<1>
(5) 関連ある図書などを積極的に読んだ	<4>	<3>	<2>	<1>
(6) 疑問点など友人に聞いたり話し合ったりした	<4>	<3>	<2>	<1>
(7) 教師に疑問点などを積極的に質問するように努めた	<4>	<3>	<2>	<1>

裏面に続きます↓

② 授業の内容・方法等について	4 あてはまる	3 ややあてはまる	2 あまりあてはまらない	1 あてはまらない
(8) 授業は理解できた	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(9) 授業の目的が示されていた	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(10) どこが重要なポイントであるかがよくわかった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(11) 学生自身に考えさせる工夫がなされていた	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(12) 授業中に学生の質問・発言などを促してくれた	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(13) 学生が提出した課題や疑問に対し適切な応答がなされた	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(14) 内容に関する興味を高めるための配慮があった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(15) 板書や視聴覚機器の文字・図表は見やすかった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(16) 教科書・参考書、プリントなどが学習の助けになった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(17) 授業内容は体系的に整理されていた	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(18) 教師の授業に対する熱意を感じた	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(19) 授業はノートを取りやすかった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(20) 成績評価の方法や基準等が明らかにされていた	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(21) クラスサイズ（受講者数）は適切だった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(22) 教室環境に問題はなかった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉

③ 授業全体を通して得られた成果等について	4 あてはまる	3 ややあてはまる	2 あまりあてはまらない	1 あてはまらない
(23) 授業に参加しているという感覚がもてた	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(24) カリキュラムの中での位置づけがよくわかる授業だった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(25) 自分が専攻したい領域にとって重要な内容だった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(26) 自分の将来の進路に役に立つと思った	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(27) 授業にわくわくするような感覚をもったことがあった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(28) 今後の学習のために必要な学力が身に付いたと思う	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(29) この授業の関連分野に興味や関心が深まった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉
(30) 総合的にみて、自分にとって意味のある授業だった	〈4〉	〈3〉	〈2〉	〈1〉

■ この授業を通して、重要であると思った概念・理論・キーワード等を以下の左欄に5つあげてください。
また、それぞれを自分がどの程度理解していると思うか右欄にマークしてください。

1.	〈4〉 理解	〈3〉 やや理解	〈2〉 やや不理解	〈1〉 不理解
2.	〈4〉 理解	〈3〉 やや理解	〈2〉 やや不理解	〈1〉 不理解
3.	〈4〉 理解	〈3〉 やや理解	〈2〉 やや不理解	〈1〉 不理解
4.	〈4〉 理解	〈3〉 やや理解	〈2〉 やや不理解	〈1〉 不理解
5.	〈4〉 理解	〈3〉 やや理解	〈2〉 やや不理解	〈1〉 不理解

■ この授業に関して、①疑問点、②印象に残った点、③授業で改善すべき点、④自らの学習を振り返って感じたこと、⑤これからの自分の学習展望など、今感じていることを以下に記述してください。
(書ききれない場合は、マーク欄にはかからない範囲で、余白を適宜利用してください。)

★記入ミス等がないか、もう一度ご確認ください。ご協力ありがとうございました。